集団分極化現象に関する研究

愛知教育大学 磯 崎 三喜年¹

広島大学 上野 徳美・天根 哲治²・横川 和章

A study on group polarization phenomenon

Mikitoshi Isozaki (*Department of Psychology, Faculty of Education, Aichi University of Education, Kariya 448*), Tokumi Ueno, Tetsuji Amane, and Kazuaki Yokogawa (*Department of Psychology, Faculty of Education, Hiroshima University, Hiroshima 730*)

The purpose of this study was to examine how an individual changes his opinion with exposure or no exposure to others' average responses and with expectation or no expectation of having his opinion made public. Subjects were 88 undergraduate students. The materials used were CDI (Choice Dilemma Items). In risky items a shift toward risk occurred under no expectation of opinion publication and exposure to others' average responses. In cautious items a shift toward caution did not take place. Group polarization was found in risky items but not in cautious items. The results were discussed in terms of the social comparison processes.

Key words: polarization, risky shift, group effect, social comparison, decision, attitude.

個人の行動が集団によってかなり規定されることはよく知られている。他者が実際に存在したり、存在がほめかされていることによって、個人の思考・感情・行動などがどのような影響を受けるかは、社会心理学の基本的課題といえる。

集団分極化現象 (group polarization phenomenon) とは、“個々人のもとの判断あるいは意見などの支配的傾向が、集団経験後さらに強められること”をさして用いられる言葉であり、集団誘発的移行 (group induced shift) とも呼ばれる。ここでの集団経験とは、他者との直接的接触だけでなく、間接的な関わりをも含む広義の集団経験を意味している。この現象は、元来 risky shift と呼ばれ、個人が集団事態に入ると、個人事態に比べてより危険な行為への決定を行うことをさして用いられてきた。しかし、逆に集団事態において cautious shift, すなわち、より安全な方向への決定をなす場合もあることから、上述したような包括的な呼び方に変化してきている。これは、CDI (Choice dilemma items: 決定のディレンマに直面した個人が、どの程度の危険を冒すべきかについてのアドバイスを被験者に求める一連の項目) を用いた研究において初めて見出されたといわれ、その説明理論としては、情報的影響及び社会的比較の2つの考え方が有力である。前者は、説得的議論によって個々人がより妥当な考えや意見へと到達する内的意

見変化との考え方であり、後者は、個人が自らをより好ましいものと知覚し、望ましい形で他者に呈示しようとする社会的動機づけの作用を強調する考え方である。

情報的影響の考えを支持する研究は多いが、Jellison & Arkin (1977) は、実際に議論を行わず集団成員個々が立場のみを表明する事態、あるいは、単に個人が他者の反応に接触しただけでも十分意見変化がみられることなどから、説得的議論が必ずしも必要ではないとしている。また説得的議論の考えでは内在化が仮定されているにもかかわらず、個人事態に戻ると分極化が見られなくなることも指摘されている。こうしたことから、他者との比較を行うことによって、より望ましいと思われる方向へ個人が意見や態度を変化させるという、いわば方略的な色彩を強く帯びた社会的比較の考え方が提出されることになる。Myers & Lamm (1976) は、社会的動機づけを態度変化の基底をなすものとし、これに実際自らに役に立つとの有用性と結びついた説得的議論が作用して分極化をひき起こすとの概念的図式を提唱している。この図式は、情報的影響と社会的比較の考え方を相反するものとはせず、社会的動機づけの作用をより基本的要件として位置づけるものである。

Myers (1978) は、こうした社会的動機づけの観点から、個人が他者の態度的反応に単に接触しただけで意見変化が見られるかどうかを検討している。結果は、他者の反応を単に知らされただけで分極化効果がみられ、社会的動機づけの作用によるものと考え方を支持するものとなっている。

¹ 本論文作成にあたりご指導いただいた広島大学教育学部小川一夫教授に心から感謝いたします。

² 現所属 兵庫教育大学。

Table 1
実験前調査の結果（6事例のみ）
N=103, () は SD

	確 率 [†] (アドバイス)	重 要 性 ^{††}	社 会 的 ^{†††} 望ましき
事 例 1	48.93% (26.42)	3.63 (1.66)	4.41 (1.16)
事 例 2	46.41% (20.43)	3.48 (1.59)	4.40 (.99)
事 例 3	46.60% (19.53)	5.85 (1.08)	5.68 (1.10)
事 例 4	43.98% (28.57)	6.63 (.74)	5.50 (1.34)
事 例 5	69.71% (20.27)	5.58 (1.30)	4.88 (1.29)
事 例 6	63.40% (21.31)	6.35 (1.05)	4.40 (1.11)

[†] 成功の確率（0—100%），数値が小なほど risky.

^{††} 事例の重要性（7段階評定），数値が大なほど重要.

^{†††} 当該行為にふみきることの社会的望ましき（7段階評定），数値が大なほど望ましい.

本研究は、上述した Myers & Lamm (1976) の考えをふまえ、単に他者の平均反応に接触しただけで分極化が生起するかどうかを検討し、分極化現象のメカニズムを探ることを目的とする。すなわち、社会的動機づけが分極化生起のより基本的な条件であるなら、他者の反応への接触が個人にとって意味のある刺激になりうると思われる。また、このような考え方に沿えば、自らの意見を同時的に存在する他者に公表する機会がある時に、他者に受け入れられようとする動機、つまり、他者に対する望ましい自己の呈示という動機がより強まると考えられる。そこで、他者の反応に接するかどうかと共に、意見公表の予期の有無によって意見がどのように変化するかについても検討を加える。

方 法

実験前調査

本実験で用いる CDI の事例の選択と、実験条件で呈示する他者の平均反応（平均値）に関する情報を得るために行われた。

被験者 男女大学生 103 名.

調査項目 Kogan & Wallach (1964) による CDI 10 事例に、筆者らが修正を加えた Stoner (1968) の 5 事例を加え計 15 事例を用いた。

CDI の例 ‘D君は、X大学のフットボールチームのキャプテンです。X大は伝統的なライバルであるY大とシーズン最後の試合をしている最中です。X大がもう1プレイするだけの時間が残っています。…複雑で危険なプレーを行うかどうかの決断を迫られています。ここで

あなたがD君にアドバイスしているところを想像して下さい。下にあげたのは、危険なプレーがうまくいく確率です。最低どのぐらいの確率があれば、危険なプレーをする価値があると思いますか。’

質問紙内容 例で示したような CDI の各事例について、(a) どのぐらいの成功の確率があれば、risk を冒す（その行為にふみきる）価値があると思うかのアドバイス評定——成功の確率が 0—100%（10% ごとの 11 段階尺度）までのいずれかをアドバイスする、(b) 各事例の当事者にとっての重要性の評定（7 段階尺度）、(c) 当該行為にふみきることの社会的望ましきの評定（7 段階尺度）などの回答を求めた。

実験前調査の結果

ここでは調査を行った 15 事例のうち、本実験で用いる 6 事例の結果のみを Table 1 に示した。これらは、各事例の評定された重要度を考慮し（重要性の高・低いずれの事例をも選択すること）、アドバイスの平均反応があまり極端でないことを条件に選択した。

Table 1 の事例 1—4 は、確率 50% 以下でも当該行為にふみきるべきだとのいわゆる risky 事例であり、事例 5 及び 6 は、確率 50% 以上ならふみきるべきだとする cautious 事例である。

本実験

被験者 男女大学生 88 名（ただし、内 22 名のデータは、実験前調査で得られた 103 名のデータから無作為に抽出したものであり、これにより本実験の情報接触も意見公表の予期もない条件を構成した³）。

質問紙内容 実験前調査の結果から選択した CDI 計 6 事例を用いた（risky 事例が 4, cautious 事例が 2 である）。また、各事例ごとにアドバイス評定尺度、重要性及び望ましきの評定尺度（実験前調査と同様）が含まれていた。

実験計画 情報接触の有無（他者の反応の平均値を呈示されるか否か）と意見公表の予期の有無の 2×2 要因計画で行った。

手続 情報接触も意見公表の予期もない条件を除き、質問紙の配布により各条件ごとに集団で一斉に行った。

情報接触の操作 実験前調査で得られた各事例ごとのアドバイス評定（確率）の平均値を尺度上に呈示するか否かによって操作した。接触有条件には、“各事例ごとに前回の調査で得られた結果（大学生 103 名によるアドバイスの平均値）が示してあります。これを参考に、あなた自身の意見を記入して下さい”と教示した。

意見公表の予期の操作 意見公表の予期有条件には、

³ 抽出された 22 名と残り 81 名とで両群間の分散及び平均値の差の検定を行なったがいずれにおいても有意な差はみられなかった。従って、22 名のデータは 103 名の中から無作為抽出されたものとみなされた。

Table 2

risky 事例 (事例 1—4) 全体の平均アドバイス値†(%)
N=22, () は SD

		意見公表の予期	
		有	無
情報接触	有	44.32 (14.05)	36.14 (15.50)
	無	46.14 (10.44)	47.27 (13.48)

† 0—100%, 数値が小なほど risky.

“いろいろな意思決定場面で迷いや悩みを持っている他者に対して、どのようなアドバイスをするかをこの場で1人ずつ発表し、全員で討論をしていただきます。そこで、あらかじめ自分の意見を記入し、それをあとで発表していただくという手続きをとりたいと思います”と教示し、併せて氏名の記入を求めるという操作を行った。予期無条件には、こうした教示は与えず、記名も求めなかった。予期有条件の場合も、実際には回答が終了した時点で討論は行わない旨を告げ、実験の意図を説明し、実験を終了した。

結 果

Table 2 は risky 事例 (事例 1—4 をまとめたもの) の平均アドバイス値を各条件ごとに示したものである。

分散分析の結果、情報接触の要因の主効果が有意であったが ($F=4.83$; $df=1/84$, $p<.05$), 意見公表の予期の要因の主効果が及び両要因の交互作用は有意ではなかった。この結果は、risky 事例全体でみた場合、他者の反応の平均値に接触することによって、その意見がより risky になることを示している。

Table 3 は cautious 事例 (事例 5 と事例 6 をまとめたもの) の平均アドバイス値を各条件ごとに示したものである。

分散分析の結果、各要因の主効果が及び交互作用はいずれも有意ではなかった。

また、Myers (1978) に基づき、各条件ごとに risky 事例 (4 事例) の平均アドバイス値から cautious 事例 (2 事例) の平均アドバイス値を引き、分極化得点を算出したが、分散分析の結果、各要因の主効果が及びその交互作用はいずれも有意ではなかった⁴。

考 察

本研究の結果から、もともと risky な傾向を示す事例の場合、他者の反応に接触することによって、より risky

Table 3

cautious 事例 (事例 5, 6) 全体の平均アドバイス値†(%)
N=22, () は SD

		意見公表の予期	
		有	無
情報接触	有	65.91 (10.40)	61.59 (19.75)
	無	61.59 (17.99)	65.23 (17.02)

† 0—100%, 数値が小なほど risky.

な判断がなされることが明らかとなった。従って、risky 事例に関していえば、他者の反応に接触しただけで意見変化を引き起こすのに十分だとする社会的比較の考え方が支持されるように思われる。すなわち、他者の平均アドバイス値を知ることにより、他者との比較において自らよりよく位置づけようとの動機づけが高まり、その結果より risky な判断を示したと考えられる。これは Fromkin (1970) 及び Myers (1978) のいう、人は他者と基本的に類似して、なおかつより望ましい方向に少しだけズレていると知覚したがるのと考えに沿った結果であるといえよう。本実験で使用した risky 事例 (Table 1 の事例 1—4) では、平均値でみる限り、いずれの場合もそのような決定を行うことは社会的に望ましいとする方向で評定されていたことから、このような解釈もある程度妥当なものと考えられる。さらに、Festinger (1954) の言葉を借りれば、斉一性への圧力 (pressure toward uniformity) と向上性の動因 (unidirectional drive upward) との均衡点であるとの見方もできるかもしれない。

ところで、自己をよりよく提示しようとする社会的動機づけの考えからすれば、他者の反応に接触した場合に、意見公表の予期のある群でより risky な判断がなされると予測されたが、そうした結果は得られなかった。むしろ条件間の平均値を比較すると、意見公表の予期のない群が予期のある群に比べてより risky な反応をしていた ($t=1.79$; $df=42$, $p<.10$)。他者の面前で自らの意見を個別に提示することが、必ずしも直接的により望ましいとされる反応を引き出すとは言えないように思われる。つまり、そうした状況では目だちすぎを避け、慎重で控え目な判断をなすような圧力の作用する可能性がある。他者の反応を知ることにより、自己をよりよく位置づけようとする社会的動機づけが高まったとしても、これを抑制する力が同時に働いていたように思われる。実験後の補足質問、‘アドバイスをするのにどの程度迷いましたか’、及び‘他の人がどのように考えているかを、どの程度知りたいと思いましたか’に対し、他者の反応に接触した意見公表の予期のある条件とない条件を

⁴ 以上の結果は、情報接触も意見公表の予期もない条件に実験前調査で得られた 103 名のデータを投入して行った分析においても同様であった。

比較してみると、統計的に有意ではないが、‘予期のある方が、それぞれ‘より迷った’、‘他の人の考えを知りたいと思った’と回答していた。これらは、上述の考えを部分的に裏づけるものといえるかもしれない。このように考えると、自己をよりよく位置づけようとする社会的動機づけは、状況によって微妙に変化する可能性がある。また、こうした欲求は課題が重要であればより顕著になると予想された。しかし、本実験の結果は事例の重要度によるアドバイス値に差はみられなかった。

cautious 事例については、予想されたようなより cautious な方向への意見変化は見出されなかった。これは、Myers (1978) の結果と異なるものであるが、Myers の研究においても、分極化は risky 事例で顕著にみられたということは注意しておく必要があろう。

集団分極化現象を説明する考え方として、社会的比較、情報的影響のほか、責任の分散説がある。これは、集団事態では他の成員が存在することによって、かりに否定的な結果が生じたとしても、個人に関わる責任が軽減されるために分極化が生起するとの考え方である。しかし、本研究では集団決定を行うことがないという状況を設定しているために、この考え方の適否を論じることはいえない。

以上、本研究では、risky 事例においては分極化現象が確認され、社会的比較の枠組で説明が試みられた。しかし、cautious 事例においては、この現象を確認することができなかった。なぜ cautious 事例において分極化現象がみられなかったかということに関しては、現在のところ明確な説明を与えることはできない。今後は、

この点を含め、CDI のみでなく、より多様な材料を用い、集団決定事態で検討を進める必要があると思われる。

引用文献

- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Fromkin, H.L. 1970 Effects of experimentally aroused feelings of undistinctiveness upon valuation of scarce and novel experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 521-529.
- Jellison, J.M., & Arkin, R.M. 1977 Social comparison of abilities: A self-presentational approach to decision making in groups. In J.M. Suls, & R.L. Miller (Eds.), *Social comparison processes*. New York: Halsted Press, Pp.235-257.
- Kogan, N., & Wallach, M.A. 1964 *Risk-taking: A study in cognition and personality*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Myers, D.G. 1978 Polarizing effects of social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 554-563.
- Myers, D.G., & Lamm, H. 1976 The group polarization phenomenon. *Psychological Bulletin*, 83, 602-627.
- Stoner, J.A.F. 1968 Risky and cautious shifts in group decisions: The influence of widely held values. *Journal of Experimental Social Psychology*, 4, 442-459.

—1980. 12. 26. 受稿, 1981. 7. 4. 受理—